



社会課題に向き合う生徒を育てる : 「論理国語」におけるジェンダー論

勝部, 尚樹

(Citation)

月刊国語教育研究, 59(624):38-39

(Issue Date)

2024-04-10

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100488597>



社会課題に向き合う 生徒を育てる

—「論理国語」におけるジェンダー論—

神戸大学附属中等教育学校

勝部 尚樹

「普通に授業の居心地が悪い気がします。ジェンダーの授業重なるほど溝ができてくる気がするのをどうにかしたいです。」
教育実習生による授業でジェンダー論を扱った。その二回目の授業の後に、授業を見ていた私にAさんが申し出てきた。五年生（高校二年生）の論理国語の授業のことである。

勤務校で今年度から使用している教科

書『新論理国語』（三省堂）では新しい書き手の教材が増えた。丸山眞男、清岡卓行、岩井克人などによる旧課程「現代文B」で扱われていた定番教材も掲載され続けているが、ブレイディみかこ、ヤマザキマリなどによる新しい社会課題を論じた文章も掲載されている。

また新学習指導要領に基づいて現代的なテーマの複数の教材が並んでいることも特徴である。大学入学共通テストの問題形式にも沿った形である。使用教科書には作家の山崎ナオコ「それぞれにじっくりくる言葉」、政治学者の前田健太郎「多様な視点から考える」、社会学者の瀬地山角「女性／男性だから〇〇」が一つの単元として設定されている。ジェンダー論は近年特に注目されるテーマで、国語の教科書に掲載されることはまだ少ないが、大学入試で出題されることも多くなってきた。今回は実習生の授業としてジェンダー論を扱うことにした。

授業では文章の読み方を指導しながら、「女性には理系が苦手」は「日本社会が生み出したものにすぎない」という筆者の主張について理解の補助となる多様な

データを提示していた。大学入試の理工系学部「女子枠」を題材としてグループや教室全体で議論する活動も取り入れた。生徒自身の身近な事例を引き出しながら主体的な活動を促す授業であったが、それがゆえに一部生徒の（誤解や誤読に基づくものも含めて）反発を招くことになった。その一部生徒の声に対して訴えてきたのが、冒頭のAさんの発言である。

授業の心理的安全性が確保できなかったことを反省しつつ、問題の理解が必要だと考えた。現代文の授業では文章の読解指導に加えてテーマの学術的・社会的な背景を解説している。この実習期間の後、ふりかえりとして私からジェンダー論について解説した。実は私自身一年以上の育児休業を取得した経験がある。男性で長期間の単独育児を取得するケースは少なく、ジェンダーギャップを当事者として経験した。その経験を活かして自治体の審議委員を務めたり、育児啓発イベントで体験談を話したりしている。高校生や大学生に対してライフデザイン、ジェンダー論を話すこともあるが、よく次のことを伝えている。職業、家事、育

児等はそれに関わるジェンダー観も含めて個人・家庭の事情があり、個人の価値観は認められるべきであるが、一方で社会課題としてのジェンダーギャップには社会全体で取り組まなければならないということ。「個人（個人の利害）」と「社会（社会全体として公正であること）」を分けて考えることである。

たとえば今回授業で議論した大学入試の女子枠については、高校生にとって個人の利害と密接に結びつくため、ある種の反発を呼びやすい。「女子よりも高い得点の男子が不合格なのはおかしい」「合格したのに優遇されたと見られる女子がかわいそう」などの類である。政治家のクオータ制（議員候補者や議席の一定数を女性に割り当てる制度）も同様の反応がある。しかし社会全体としての公正さを考慮すると、ジェンダーギャップ解消・格差是正のためのアフアーマティブ・アクションは必要だということになる。

私の授業の後、Aさんが再びやってきた。今回の授業をきっかけにテーマに関するさまざまな本を自分で読んだらしい。「教室で声の大きかった「保守派」の

意見が一定数あるのが今の日本の状況だとリアルに体験できました。自分のSNSで見ている世界はリベラルだから、授業のできごとには驚いたけれど、これがエコーチェンバー（※）ですね。その意味で、今回の一連のジェンダー論はとても勉強になりました。」（※自分と似た興味関心を持つ者同士で交流すること、自分の意見が強化されること。）

さて、教育実習生の授業を含めた単元全体は「書くこと」が指導事項の単元「社会問題を考える」で、最後に新聞投書を書くことにした。まずジェンダー論も含めて社会問題を扱った複数の教材を読んだあと、用意された人数分以上の新聞（複数社）を開きながら投書を読む。掲載のための「傾向と対策」を考えてから、それに則って投書の原稿を書く。相互評価と修正を踏まえて、実際に任意の新聞社に自分で投稿するというもの（実名が掲載されるので投稿も任意とした）。生徒は社会課題について、身近な経験を織り交ぜながら高校生ならではの視点で書いており、実際に数多く（投稿数の五分の一以上）の投書が掲載された。

テーマは若者の政治認識、教育の問題、円安の問題、パワハラ問題など多岐にわたる。掲載料として図書カードを受け取ったことを抜きにしても、掲載された生徒はみな嬉しそうであった。実社会で起きている事柄について問題を提起して社会に対して直接自分の主張を伝える新聞投書は有意義な「真正のパフォーマンス課題」となった。教員ではなく生徒自身が投稿することにも意義があった。

先述の出来事をまとめたAさんの投書もほどなくして掲載された。

抽象度の高い文章で論じられている問題を自分の問題として考え、他者と議論をして、自分の意見を書く。国語の授業は言葉を通した、社会や知の世界への入り口となる。教室内で違和感を持ったAさんは自ら関連書籍を読むなど学びが駆動したといえるが、たどり着いた「今の日本の状況」は非常に多くの課題が残されているという事実であった。それでも、国語の授業で言葉を通じて個人と社会の問題を考え、現代の社会課題に向き合う生徒を育てることは、国語科教員としての私の使命である。